

○中島正明・江頭淳二
（佐賀農業セ三瀬分場）

【目的】

中山間地の夏季冷涼な気象などを活かしたイチゴ早出し栽培において、育苗の省力化を目的とした据え置き2年株の利用技術を開発する。これまで、局所温度制御を利用した据え置き2年株では、基肥無施用で追肥中心の施肥が生産力が高いことを明らかにした。本報では、据え置き2年株と慣行栽培の定植株を比較検討したので報告する。

【材料および方法】

試験は三瀬分場（標高約400m）の雨よけハウス（間口6m，奥行き18m）を用い高設栽培（シートタイプ，培地量3.7リットル/株）で行った。供試品種は「さがほのか」で、据え置き2年株（2011年は2010年の7月8日，2012年は2011年7月8日に定植，翌年6月まで収穫，その後果房を除去し2芽に整理）と，対照として当地域の慣行栽培の定植株（2011年は8月18日，2012年は8月29日に定植）と比較した。施肥は，据え置き2年株はかん水同時施肥（N濃度45ppm），定植株は基肥をN成分で700mg/株施用し，据え置き2年株と同量のかん水同時施肥を実施した。また，局所温度制御は，クラウン部に密着させた鉄管に，2011年は冷水のみ，2012年は冷温水を通水して行った。夏秋季の冷却は18℃程度の井戸水を通水することで，クラウン部の温度は20℃前後となった。冬季の加温は温湯ボイラーの温水を同じ鉄管に通

水することで，クラウン部の最低温度を18℃前後に確保した。

【結果および考察】

収穫開始時期は，定植株では2011年は10月からであったが，夏季の高温の影響で定植が遅れた2012年では11月からとなった。「さがほのか」の据え置き株き2年株では，6月に果房を除去しても果房の連続性があるため7月に蕾し，2011年，2012年とも安定して8月からの収穫始めとなり，いずれの年も定植株より早出しとなった。収量は，据え置き2年株が10月までは定植株より多いが，11月までは差が無くなった。しかし，年内収量は据え置き2年株が再び多くなり，2012年では有意に多かった。また，2011年の据え置き2年株では，翌年の6月までの収量は定植株と同程度であったが，2012年の据え置き2年株の翌年の4月までの収量は，定植株の収量が2011年と差が無かったのに対して，据え置き2年株は2011年より多くなり，定植株に比べ有意に多くなった（図1）。月別の平均果重は，据え置き2年株と定植株では差が無く，平均糖度も同様に有意な差はなかった（図2，3）。

以上の結果から，据え置き2年株の利用では，定植株と同程度以上の収量が得られ，平均果重や糖度の品質に差が無いことから，育苗の省力化が可能となる。なお，この成果は，新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業によって得られたものである。

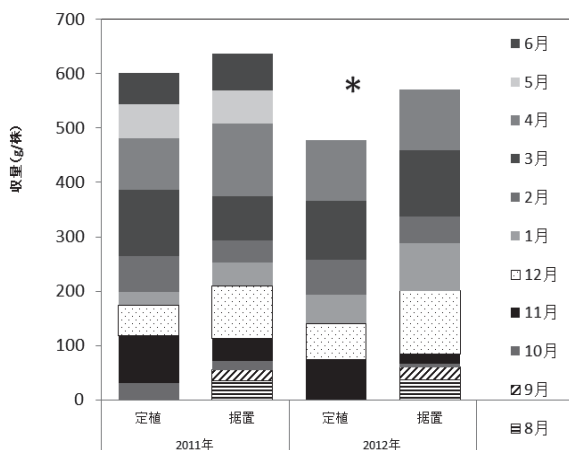


図1 定植株と据置株の月別収量
注) *は分散分析で5%水準で有意差あり(n=10)

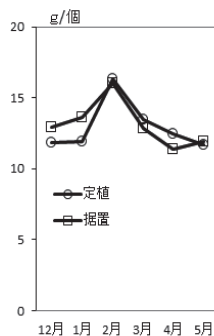


図2 月別の平均果重
(2012年)

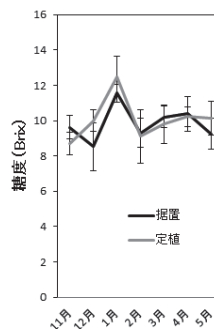


図3 月別の糖度(2012年)
注1) 誤差線は標準偏差